

休校と同時に職員の在宅勤務が始まった。完全に在宅とできないのは、事務仕事が通常通りなのに加え、やむを得ぬ事情がある場合に限り、と念を押して預かる児童がいるからだ。交代でその子たちの見守りをしているの、職員に一定の出勤を求めている。

預かりの子どもの把握や、職員のシフトを組むのは私の仕事なので在宅勤務というわけにいかず、相変わらず朝から晩まで連日学校にいる。一週間もするとそれなりにこなれてくるもので、なるようにしかならない日を一日一日やり過ごす。

とはいえ、ここにきて気づいたのは、自分の日常がこれまでとそれほど変わらないではないか、ということである。

夜明け前に起き出して、一時間ばかり走る。すれ違う人など四五人だ。いつも同じ人。お互い時計代わりになりそうなほどには几帳面ではないので、出会う場所はまちまちだけれど。どこであろうと二メートルの間隔など意識する必要もない。

それに自転車通勤での行き帰り。これで一日の運動は十分。社交的ではないので積極的に出会いを求めることもしてこなかった。ゆえに帰宅してからも休日も、用事がそれほどあるわけでもない。人が多いという理由で出かけるのを止めるのはずっと以前からだ。

つまりもともと三密を避けて暮らしていたのだった。あきれるほど変化はない。自分の暮らしかけに限れば。

県の感染者報告があつて、国の緊急事態宣言が出て、市の休校が決まった翌朝、ぼくはいつもと同じように暗いうちに起き出して、同じ服を着て、同じスニーカーを履いて、同じだけ準備運動をして、走り始めた。でも、まだ夜をいくらか残した町は、ちよつと変わっている気がした。

すれ違うお婆さんがマスクをしていた。川土手で犬を散歩させているお爺さんが歌を歌っていた。あいさつしてもろくに返事もしない無愛想な人が朗々と賛美歌を歌っている。いつもの人たちもいつもの朝を迎えたらしい。

日米開戦の知らせを受けたときの一新した空気を描いた作家たちのことが浮かんだ。「空の色さえ潔い」、「昨日は遠い昔」、などなど。きつぱりと画いた昨日と今日を彼らはうたつた。その先に待ち受けていたものなど彼らの視界にはまるで映っていない。想像したところで見えないものなのか、見ようとしなかったのか。

いつもと何かが違う朝。今はまだ見えないもの、今はまだ言えないものがそこにある朝。



専業ババ奮闘記(その2) 3

木幡智恵美

インフルエンザ(3)

「お袋、どうした。大丈夫」

その夜、三人で囲む夕食の席でのこと。私の健康状態をいち早く、いや、家族で唯一察知してくれる息子が言った。

「なんか、力が抜けたようになって」

そう答えると、昼間の光景がよみがえった。

かかりつけ医で紹介状を書いてもらい、その足で総合病院に向かって診察を受ける。ずっと一緒に車椅子で回った同じデイサービスに通うMさんに続き、肺炎のために入院することになった。医師からは、尿検査の結果もかなり悪く、約二週間程度の入院になること、高齢のため、予期せぬ事態も起こりうることなどの説明を受ける。病室に移された義母を残し、一旦家に帰り、入院に必要なものを紙袋に詰め、一人で歩いて病室に向かった。

明日また来ると義母に言っただけで病室を出、階段を下りようとすると、脚力が入らない。体調が悪いわけではない。何だか体中の力が抜けてしまった感じになったのだ。

翌朝、やけに早く目が覚め、早々と台所に降りた。毎朝一番にすることは、義母の食事の準備だ。けれど、今朝はその仕事がない。部屋を覗いて様子を見、検温したり、オムツ交換したりも、今日はしなくていいのだ。その時、ようやく昨日の脱力感の意味が分かった。我が子の入院や夫の度々の入院を経験しているのに、こんな感じは初めてだ。我が子や夫の場合、入院するとやることは増え、時間的に余裕がなくなっていた。ところが、義母の場合は逆だ。これまでも多少の介護はしていたが、この一週間はほぼ全面介護。介護に費やしていた時間と労力が目の前からすっぽり抜けてしまったのだ。連れ合いの介護を終え、看取った後うつになる方の話を聞いたことがある。その方の思いが少しわかったような気がした。

30代フリーター やあ、ジイさん。

「これは戦争だ」と繰り返すトランプの言葉を引いて、朝日新聞が戦時経済色を強めるアメリカの様変わりぶりを伝えている(4月20日朝刊)。

年金生活者 アメリカに限らず、新型コロナウイルス対策を「戦争」と呼ぶのは、比喩にとどまらず、実態を表す言い方になっている。

これだけ大がかりな人の移動の制限がこれまで戦時以外に行われたことがあったらどうか。ウイルスを封じ込めることに主眼を置いた各国の新型コロナ対策は、敵を封じ込めることを目指す「戦争」に近いアクションということができる。

敵軍なら、封じ込めれば、補給を断たれ、降伏するかもしれない。だが、ウイルスは封じ込めをゆるめればたちまち動き出す。武装解除することはできない。そうである以上、ウイルスの攻撃にいちいち反撃するのではなく、「被害を最小限に抑えつつ、私たち人類が集団としての免疫を獲得するこ

と」(山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授、3月11日朝日新聞朝刊)によつてウイルスと「共存」する以外にない。

30代 それは勝つか負けるかしかない戦争の常識に反するな。

年金 それでも各国政府が新型コロナに「戦争」のように臨むのは、「被害を最小限に抑え」るのに封じ込めが必要だからというだけではない。

国家の主要な機能は富の再分配と国防・治安だ。国家が諸問題を解決するために持ち合わせている手段はほとんどそれだけといっていい。新型コロナに対しても現金給付をはじめとする再分配と、封じ込めを目指す「戦争」によつて事態を始末しようとしている。

国家を共同の意志の主体と考えるなら、国家はそれらの機能を発揮することによつておのれの存在理由を保とうとするはずだ。抑止力を競う冷たい戦争しかできなくなった21世紀の国家にとつて、ウイルスを敵とした熱い「戦争」は冷たい戦争のリァリティーの不

足を補ってくれる。個人や企業への権力の分散が進んだ現在の国家にとつて、戦時経済は分散した権力を回収するかつこうの手段だ。

30代 そこに無理が生じる。

年金 「戦時」の統制経済、すなわち過剰な再分配による自由な市場の棄損と、私権制限による個人の自由の侵害に対する反発がいまアメリカで都市封鎖の解除を求めるデモとなつて噴出している。

強制ではなく自粛で事態を乗り切ろうとしている日本はその点で諸外国より「戦時」色が薄い。その背景には、強制されなくても進んで服従する、天皇制下で形成された日本人のメンタリティーと、憲法9条に結晶した、戦争を忌避する国民のアイデンティティーがあると考えられることができる。

30代 緊急事態宣言を全国に拡大したときの安倍晋三の記者会見をリベラル派のジャーナリストの津田大介が「冒頭スピーチは今までで一番良かった」とツイッターでほめていたのは意外

だった。もつとも、そのすぐあとで批判もしていたが。

年金 外出の自粛を求めることは、経済にブレーキをかけ、国民生活を脅かすことを意味する。安倍晋三はいま自らの政権を危うくするかもしれない政策の実行をウイルスに強いられる。

記者会見は本人がそのことをよく承知していることをうかがわせた。気に入らない質問に時おり見せるけんか腰の構えは影を潜め、国民にじかに訴えかける話し方を心がけているように見えた。政治信条としてきた「闘う政治家」(『美しい国へ』)のファイティングポーズはそこにはなかった。

分断が進む社会で、分断の向こう側の相手を攻撃することで味方の結束を固め、選挙に勝ち続けてきた彼にとつて、それは戦略転換を意味する。彼は新型コロナへの対処を「戦い」と呼んではいるが、人間相手の戦いとは違つて、ファイティングポーズで威嚇したり、目くらしをしたりする戦術が通

## ニュース日記 735 中村 礼治

# ウイルスとは戦争できない

用しないことをこれまでに思い知らされたはずだ。「闘う政治家」としてだれかを敵とするのではなく、国民すべてに訴える語り口を津田大介は評価したのだと思う。

30代 朝日新聞の世論調査(18、19日)によると、安倍内閣は支持率41%と不支持率41%が拮抗している(4月21日朝刊)。政権が危ういなどとは言えない数字だ。

年金 その世論調査では、外出の自粛やイベントの中止にストレスを感じるかとの問いに「それほどでもない」が58%と、「感じる」の40%を上回っている。バーチャルな外出やイベントを可能にするインターネットの存在の大きさを感ぜさせる数字だ。

インターネットのない時代だったから、外出規制で人影のなくなった街でこっそり営業する秘密の飲み屋ができたかもしれない。だが、現在の日本ではウェブ会議アプリを使った「オンライン飲み会」が広がりだし、それ専用のサービスまで出現している。

調査では、首相は指導力を「発揮していない」が57%に及んでいるのに、支持率が底堅いのは、現職に代わる人物が見当たらないからというだけではないだろう。自粛によるストレスを「それほどでもない」と感じている58%が、指導力を「発揮していない」と考える57%を相殺していると考えられることができる。